座談会

ローカルマネーの可能性

西部 忠
絓 秀実
西部 邁

貨幣があってはじめて経済交換のための市場が社会の一般的制度として確立される。「地域」にあっても、それが自律的であるためには、地域に根差す貨幣があって然るべきだ。少なくとも地域貨幣を構想・試行してみることには大きな意義がある。だが、どんな地域も国家的な構図のなかに配置され、さらに他の諸地域との「地際的」な連関を有している。そこで地域貨幣はどんな変容を遂げるか。ローカルマネーを専門的に研究している西部忠氏を招いての議論に熱が帯びる。

「地域」はリージョンかローカルか

主幹　今日は西部忠さんに「リージョン＝地域」について話して頂きたく、お出まし願いました。

小生はずいぶん前からコンサーバティブ＝保守思想をやってきたんですが、ご存知かどうか、実は保守には昔からリージョナリストが多いんですね。保守思想とは要するに、ごく簡単にいってしまえば「歴史の流れを大事にしよう」ということです。「歴史の流れ」の実体は「慣習の体系」です――もっとも、守りたいのは慣習そのものよりも、慣習が内蔵するであろう「国民の良識の体系」なわけですが、いずれにしても良識の運び手として慣習の体系が必要だろう――それならば慣習の実体はどこにあるのか。当然ながら「地域」というものを考えなければそれを具体的に論じられない。これは十八世紀の末から連綿と続く保守思想の発想です。

もうひとつの議題は、絓さんの導きもあったんですが、「アナーキズム」について。僕は二十歳の頃、気質的にアナーキストだったと自分では思うけれども、プルードンは晩年、ある種のリージョナリストになっていった。僕はそれにも簡単に頷けたんです。なぜなら、いくらアナーキストといっても「秩序がなくていい」なんて言うわけがない。バクーニンが「破壊主義者」とされたのだって、破壊が目的だったのではなく、「目前にある秩序を破壊しなければ何も生まれない」という意味で破壊主義者として立ち上がったにすぎない。つまりアナーキストといえども、秩序がなければ社会がもたないことを知ってる。しかし必要な秩序というのは、中央政府の人為的統治による秩序ではなしに、それぞれの地域の人々が意識的にか半意識的にか了解し合っている地域の秩序というものをこそ信頼しようと、プルードンの場合は特に晩年にそう考えるようになった、そういう本を絓さんから見せて頂いた。

ヨーロッパの近代思想が確立されたのは、表面上ではフランス革命の時だけれども、一方ではイギリスを中心にして、エドマンド・バーク以来、近代主義に対する抵抗がずっと続く。ヨーロッパ大陸では、アナーキストが近代主義に抵抗していく。少なくとも、のちのマルクス主義、レーニン主義につながる流れに抵抗するのがアナーキストの根本姿勢であったことを考えると、思想の源泉を辿ればコンサーバティブとアナーキストは背中合わせに立っていたところがあるんじゃないか。しかし日本のヨーロッパ理解のなかでは、両者が地域主義という同じ原理に接近していたというごく平凡な点すらしっかり押さえられないままきている。

そんなことを考えていたら、僕と同姓の人で、ローカルマネーや、LETS（＝ローカル・エクスチェンジ・トレーディング・システム）について北海道で研究している方がいる、というのでお越し願ったわけです。

僕は北海道出身ですが、さいきん東京にも飽きてきまして、しょっちゅう札幌に帰っては、北海道復興運動の一助にもなるかと――あまり成果も上がらないんですが――人を集めていろいろやってる。そのことは後で言いますが、具体的な地域の中で、具体的なアクション・プログラムというべきものを、みんなで集まって相互批判を交えながら構成していくという形でマーケットシステムを拡大すれば、市場活力とやらがつくのではないか。東京にいる僕がその旗振りに少しは協力できるかも知れない。その点でも北海道におられる忠さんに、お話をうかがいたい。

絃　北海道経済のことでいうと、西部忠さんはエアドゥなんかをローカルマネーでやろうとしてるんだよね？

西部忠　そうですね。そういうアイディアは持っていますが、現実にはそれどころではないという感じです。エアドゥは今も道による資金提供についてもめてます。

アナーキズムとリージョナリズムの関係についてですが、僕が「地域通貨」あるいは「地域」と言う場合、二つの側面で考えたいと思っています。一つは〈実体的・物理的な〉地域であり、人が住む「近隣」を、「地縁」の広がりとして捉えるわけです。たとえば近所づきあい、町内会、学区というものがあって、「血縁」もそれにつながるものです。「リアル」な地域という言い方がわかりやすいかもしれません。もう一つが、バーチャルな地域です。ある種の関心なり理念でもって結合されるバーチャル・コミュニティ、これもローカルな地域と考えています。

地域通貨もこの二側面から考えられます。プルードンが言った「連合主義」＝フェデレーションというのは、必ずしもネイバーフッドという意味ではなくて、よりアイディアルなものにおいて繋がる関係を指している。そういう意味ではアソシエーションと言うべきものかなと見ています。

地域通貨というのも一緒くたに言われてますが、町内会レベルでローカルマネーなるものを使おうというのもあれば、エコロジーとか農業とか、もう少しテーマ性を持ったものもあります。なのでいわゆる地縁主義の延長としての地域主義というよりは、僕が地域と言う場合には、アイディアルな方、具体的にはインターネットの上で存在しているようなメーリングリストや同好会、そういうものを意識しています。

主幹　アソシエーションというのも、もちろん理解できるんです。

僕はコンピューターに触ったこともありませんが、良かれ悪しかれ、「黒豚を食べましょう会」といった個別のテーマに細分化すると、稚内と那覇の人の間にコミュニケーションが成り立つかも知れない。しかし、一人の人間の具体に対する関心がいろんな形で機能的に細分化され統合された結果、人格なき人間の出現、それが現代社会の実態ということになってしまった。僕の判断では、人格の統一性・一貫性が失われているのが現代の問題性であるわけです。

血縁・地縁というと、いかにも半封建的制度に聞こえるけれど、実際には理念なりテーマなりをある種の連絡を持ちながら立ち現れるもっとも原初的な場所として、リアルな地域がある。あるいは人格の統一性が問題だとすると、人間というのは、そう簡単には地域から離れられないというのがあると思う。

西部忠　おっしゃることはわかりますし、人格的な統合が成立する場所という意味でいちばん原初的なのは家族であり、その広がりのなかに地域があるとは思います。ただ、どういうところに〈場所〉を求めるか、その場所性というのは必ずしもいま私が住んでる所〉としなくてもよいという考え方もできるのではないでしょうか。

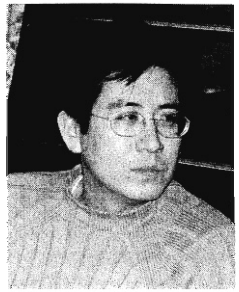
主幹　僕にもそれを認める部分が確かにありますが、あなた方に対する若干の切り込みも含めて言いましょう。associate（結合）の反対はdissociate（分離）ですね。極端にいうと夫婦というのは互いにassociateしながらdissociateする。dissociationの面のみを考えれば、リアルな地域を超越して稚内と那覇でassociateしようということも大いにあるでしょう。ところがやっかいなことに、人間というのは結合と分離の両面性を持っている。その両面のバランスの取り方における地域性というのは残る。たとえば東京人と福井人では、くっつき方も離れ方も違う。

ただ、人間づきあいのルールも実体というより形式である部分が強くて、そこまで考えた時には、地域についても実体か形式かという話になってしまう。つまり僕にしても、単純に「実体としてのリージョン」とは思えないところはある。

西部忠　言葉というのも地域に根ざすものだし、たとえば商習慣にしても明らかな違いがあります。僕が北海道に来ていちばん驚いたのが、マクドナルドなんかで注文を確認する際に「これでよろしかったですか」と過去形で言われたことで、それは非常に丁寧な言い方らしいんです。

言葉の面でも習慣の面でも、そういう地域性というのが確かにあって、別の言い方をすれば、attachmentとdetachment、つまり感情として愛情が持てることとそうでないことがある。やはり自分の生まれ育った場所にはattachmentが生じます。おそらく地域主義というのはそうしたルーツから発生しているでしょう。地域〈主義〉と言う時には感情と理念の両方の意味を含んでいるとは思います。

僕の場合は、どちらかというと後者に重きを置いているということですね。



西部　忠　にしべ　まこと

1962年福井県生まれ。経済学者。東京大学経済学部卒業。同大大学院経済学研究科、ヨーク大学経済学研究科を経て、現在、北海道大学大学院経済学研究科助教授。著作に『市場像の系譜学』（東洋経済新報社）、論文に「【地域】通貨LETS」「コミュニケーションとしての貨幣」「LETS論」「社会企業家オーウェン」など。

市場の発生は地域内か地域間か

主幹　ヨーロッパでは六―七割の物品が地域内で自給されているということですね。忠さんは福井から札幌、反対に僕は札幌から東京に移動してるけれども、地域経済の安定した自立性というのは、地域住民の定住性と関係あると思うんですがどうでしょう。

西部忠　そうですね。その話に行く前に避けて通れないのが、マーケットの成り立ちについての問題なんです。

　各地域にハビット（習慣）とかコンベンション（慣例）といった固有なものがあって、普遍的なものがルールとして地域化すると、それに基づいたマーケットができる。つまり習慣を敷衍したものとしてマーケットを捉える考え方があるわけです。マーケットというのは各地域固有の文化性・習慣性というものにのっとったもので、それを通じて物や通貨や人の移動が生じる。マーケットが広がった必然的な結果として我々は動くんであって、単に地域性が崩れたから移動しているとは、僕は考えません。二〇〇年前にはニューヨークに行って一週間で戻ってくるなんてことはあり得なかったわけですから、まずマーケットをどう捉えるのかということを通過しておかないとならないわけです。

主幹　なるほど。ひとつ確認させてください。マーケットの発生については二つの対極的な見方がありますね。主流の見方は、共同体と共同体のあいだの交易が、「沈黙交易」から徐々に広がって、「間」に派生したマーケットが両方の共同体を浸食していくというもの。もう一つは、共同体の内部の交易によって物質的に豊かになり、他の共同体との交易が始まったというもの。後者の意見は少ないと思うんですがどちらの説を採りますか。

絓　わかりやすく言えば、後者の方ですね。

主幹　僕もそっちなんです。

西部忠　共同体の内部からマーケットが生まれるというのは、アダム・スミスが言っているような互換制度の発展としてそれを捉えるということです。つまりお互いの物々交換が頻度と範囲を拡げていってマーケットになったということですね。他方の見方は、共同体間の交易や遠隔地貿易が共同体の中に反射して、外部関係によっていったん共同体的関係を崩し、国内市場として再編成していくというものです。

　マーケットにはこれら両面があると思うのですが、資本主義の生成をもたらしたのは後者の意味でのマーケットだと僕は考えています。

絓　後者はゲルマン的というか、ドイツの社会学者たちが考えたことですね、たとえばテンニースのような。また捉えているマーケットの大きさの違いということもある。

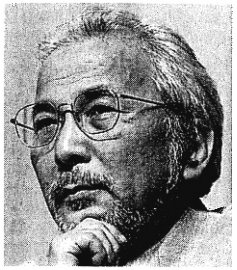
主幹　共同体の間に交易が発生するというのはわかるんだけれども、そういう消費形態が生産過程を包摂する段階では、単純なマーケット的原理から外れると思うんです。生産までくると、労働の問題が出てきますから。僕はどうしてもそこで「オーガナイゼーション」＝組織化が発生すると思う。未来というものが不確実で、市場の交換関係があまりに不安定になるため、それを少しでも安定化させようとして経済のど真ん中に組織が発生してしまう。組織というのは固定した人間関係のことです。長期的な人間関係ができると、合理的な契約関係「ゲゼルシャフト」を安定させるためには、非合理とも言えるけれど感情共同体のような「ゲマインシャフト」がなければいけない。つまり経済のど真ん中に発生する組織には共同体性が入ってきてしまう。そうすると、「共同体間の交換関係がマーケットだ」といって済ますことはできないのではないかと思うんです。

西部忠　マーケットがコミュニティをそのまま受け入れつないでいくということはないと思います。マーケットはまず従来のコミュニティを壊してしまうからです。市場原理と対抗する形で反射的にできてくる組織原理にもいろんな問題があるのですが、いずれにしてもおっしゃるように、オーガニゼーションがマーケットの中に出てきます。初めは生産を担うオーガニゼーションやコーポレーションというのは、国民国家の枠内にだいたい入っているものだった。ところが今のグローバリゼーションというのは、マーケットそのものが広範囲に拡大していくのと同時に、コーポレーションそのものがマルチ・ナショナルになってきている状態です。オーガニゼーションの内部でも国境を越えたグローバルな関係ができていくわけです。これはもはや単なるゲマインシャフトではありません。

　例えばソニーという会社の中にいる人たちが共有しているソニー精神というのがいちばんわかりやすいと思うんです。これはある種の企業理念ですね。しかし同じソニーでも、日本とアメリカとマレーシアでは、中にいる人々の結合関係というのは全然違うだろうし、雇用関係も違ってくる。つまり企業というものは単なる契約関係というよりは、一定の価値観を基盤にしつつも、多様な地場、地元の文化との結び付きにおいて初めて成立するものだと思うんです。オーガニゼーション自体がコミュニティを越えて成立していく側面があるんですね。

ローカルマネーは「信頼」されうるか

主幹　忠さんが考えるローカルマネーというのは、物理的には遠距離のものも含めたものなんですね。具体的に言うと、実際



西部　邁　にしべ　すすむ

1939年北海道生まれ。東京大学経済学部卒業。横浜国立大学経済学部助教授、東京大学教養学部教授を経て、88年に辞任。現在月刊誌『発言者』主幹。著作に『経済倫理学序説』『大衆への反逆』『思想の英雄たち』『知性の構造』『知識人の生態』など多数。近著に、『福澤諭吉』（文藝春秋社）、『国民の道徳』（産経新聞社）などがある。

に手渡しでやり取りされる貨幣ではなく、電子マネーみたいなものなんですか？

西部忠　そうですね。マーケットにしても貨幣にしても、グローバルなものからリージョナルなものまであり、あるいはナショナルなものもあって、ローカルなものもあるというふうに、多層的なものです。ローカルマネーもそれに対応する形で存在することになる。小学校地区レベルのものもあっていいし、上の方にはバーチャルな、電子マネー的なものもあっていいということでやってきています。

主幹　テレビで見たんだけれども、ボストンの方では実体的な意味でのリージョンでローカルマネーが流通しているようですね。物理的な地域において、リサイクル運動と絡む形で地域の住民たちが通貨を発行していて、地域でできた野菜類が買えたりする。

西部忠　イサカアワーのことですね。イサカ市ではグリーンスターという生協が中心になって、信用金庫もバックアップして紙幣を発行している。ドルをイサカアワーに両替してくれたり、イサカアワーを預金したりもできるんです。確か二十マイル四方のエリアの中で流通しています。いま世界中のあちこちでやっているローカルマネーは、イサカアワーと同様にほとんどが実体的な地域に根ざしたもので、そういう地域通貨は全世界で二千以上あると言われています。

主幹　一九七〇年前後にヨーロッパが金融危機に襲われた時、スイスなんかでは金利がマイナスというか保管料を取られるという事態になった。イタリアでは、全土の金融システムが崩壊した時にある市が貨幣を発行したんですね。ヨーロッパの場合、地域共同体ということになるんですが、地域的に自立した経済圏・文化圏というのがもともとあって、歴史的背景に基づいた外部との安定した接触、つまりリージョンとして自立してしまえというのがあったけれども、あなたがいうようにアイディアル・マーケット、アイディアル・マネーを強調する流れがあるんですね。

西部忠　それが今ここにあるわけではなく、そういう方向を目指すべきではないかということです。

　先進国だけではなく、第三世界でもグローバル・マネーに対抗してローカルマネーを発行してまして、アルゼンチンでは、九八年の南米通貨危機の時も自国通貨ペソを一ペソ＝一ドルに固定していたため、ブラジルなど周辺諸国の通貨が下落するなかでペソが割高となり国内の不況が広がりました。いわばペソが庶民には手に入らないような価値の高いお金になってしまったわけです。その時に出てきたのが、グローバル交換リング（RGT）なんです。これには一〇〇万人くらいの人が入っていて、アルゼンチンだけではなく周辺諸国にも広がっている。僕は一昨年訪れたんですが、ブエノスアイレスの数百カ所で食料や雑貨のバザーが開かれていました。それは、グローバリゼーションの結果として地域経済が通貨的な問題によって疲弊してしまった時に、民衆レベルの切実な必要性から生まれたローカルマネーだと言えるのではないでしょうか。

主幹　その時の通貨発行当局の信頼はどうなっているんでしょう。

西部忠　アルゼンチンのRGTの場合は「クレジット」という紙幣ですから当然発行者がいるわけです。ブエノスアイレスだけでも、各地区ごとに発行している。発行に対する責任は、各地区の発行委員会が負っています。センターとか北区とか、発行者がいるわけですけど、僕が実際に行ったあるバザーでは、センターが過剰に発行しているので、我々は何番以上のシリアルナンバー（連続番号）の「クレジット」は受け取らないという世話役もいるんですね。

　さきほどの話に戻ると、イサカの場合は、まず自分で貨幣を発行してしまったポール・グローバーという非常に有名な人がいて、彼の信用で広がっていったわけですけれど、彼自身が「自分のお金というのでは」と言い出して、結局委員会を作って発行のルールを作ったわけです。原初的な段階では、こうした個人への信頼が貨幣に対する信頼のかなりの部分を占めるでしょう。

　LETSというのはまた違うんです。紙幣を発行しませんから。各自が口座を持っていて、全員がゼロから出発して、取引の時に売り手がプラス買い手がマイナスを口座上に記録するわけです。敢えて言うなら、個々人が発行者なんで、相手を信頼できるか見極めた上で取引されるわけです。

価格の安定と貨幣への信頼

主幹　貨幣発生論について触れると、カール・メンガーという人がいて、salability 販売可能性ということを言いましたね。金なら販売可能性が高いということで、金が貨幣になったという説。吉沢英成君という甲南大学の学長になった人がそれを批判して、金の販売可能性が高いとわかるには、その前にマーケットが確立していなければならないだろうと主張した。マーケットの前に貨幣ありき、という論理です。そして、共同象徴として貨幣観念があるのではないか、観念のうえで取引をしているという点で、つまり貨幣という共同観念が最初にあるとも主張した。精神論的に言えば、そういうものだろうと領けるんですよ。カルナップが貨幣国定説を唱えたのにしても、人々が政府に対する一応の信頼があって、日本であれば、政府系統が発行する日本銀行券を信頼しようというのは、共同象徴への信頼ですね。共同象徴性の浅いレベルとして国家象徴がある。ローカルマネーの場合はどうなんでしょう。

西部忠　貨幣というのは我々にとって生得的な共同観念なのかどうかはわからないけれども、我々が言語能力を先天的に持っているように、貨幣というものも物々交換から生まれてくるものではなく元々あっただろうと僕も考えています。

ただ貨幣というのはあくまでも形式的な存在であって、何でもその中に入りうるということではないか。ある時は物理的性質によって金に帰着することもあれば、経済人類学でいう、特定の目的、つまり名誉だったり地位だったりを象徴する特定の財に帰着する。しかし、金がなくなって紙幣やさらに電子マネーになるというプロセスの中でもなお、「形式性」というのは残るんですね。逆に言えば、貨幣は純粋な形式性になりうる存在だということでもあるんです。

主幹　おっしゃることはわかりますが、際どいところだと思うんです。何年か前に、岩井克人氏が「貨幣は貨幣であることによって貨幣である」といいましたが、経済がゼロ成長で貨幣は形式的存在だという気持ちはわかるんですよ。しかしハイパー・インフレーションになった時、その貨幣世界というのはどこかで崩壊するわけですね。岩井君もその場合のことを考えるべきなんじゃないか。つまり人間はハイパー・インフレーションには耐えられない。たとえば、今日は一〇〇円だったものが明日には一、〇〇〇円になり、また一〇、〇〇〇円になるということが起こった時、貨幣が単なる形式なら、一日ごとに十を掛けていけばいいわけだからどうってことない。ましてや帳簿の上で十倍していけば何の齟齬もない。しかし実際には、ハイパー・インフレーションは崩れるわけでしょう。

絓　彼の場合は、ハイパー・インフレーションになったら、どんどん進む、という話ですね。

主幹　どこかで崩壊するとは書いているし、現に崩壊してますけどね。アルゼンチンの場合がハイパーかどうかは別にして。

西部忠　僕は形式性というふうに考えていますけれども、岩井さんの場合は非常に合理的に考えていると思うんです。つまり自分が貨幣を受け取るのは、次の人が受け取るからだと。言ってみれば将来についての論理的な予想から貨幣を受け取ると。

僕はそれとは別の立場から考えています。実はもう一方の局面があって、それが「慣習」、もっと言えば「惰性」だと思ってるんです。今日一〇〇円のものは明日も一〇〇円であるはずだというのは、昨日もそれは一〇〇円だったからということがあるのではないか。ここでは、人間の持っている日常生活における惰性性・慣習性が踏まえられています。確かに、貨幣には過去からの慣習と未来への予想の両方が入っているでしょう。ただ予想を強調しすぎると、人々はあたかも合理的な期待だけで貨幣を持っていて、ハイパー・インフレーションになってきた時には貨幣から逃げていき、ますますインフレーションが累進していくということになる。貨幣そのものの見通しが違う気がします。

主幹　慣習としての価格体系というのは「実体としての地域」という論点と同じことで、もっとわかりやすい例を出しましょう。

美人投票というのは、自分が美人と思うかではなく、みんなが美人と思う人の当てっこゲームですね。つまり民主主義的な世論を予想するものである。岩井君が、そういう時代がきたということを言ったんです。つまり実体ではなくて、人々がどう思うかというバーチャリティの世界ですね。僕はそれは無理だと思うんです。急に話が俗的になりますが、僕だって美人については少々意見を持っていて、僕のカテゴリーの中でひどいなと思うのは、きっと皆さんもひどいと思うんですよ(笑)。あの子は美人だね、と言うときには、まあまあねという程度には同意があるのです。インフレーションも美人も同じ問題で、価格にはある種の固定性があるはずなんです。みんながそう思うからそれに倣えば交換が成り立つという言い方をしてしまうのは、バーチャリティの幅が無限に広がりうるのならそれも認めるけれど、どこかで実体からの復讐があって、あれはどう考えても美人じゃないとか、リンゴが一日で十倍の値に上がるなんていうのは、どう考えても納得がいかないとかいうことが起こる。昨日一、〇〇〇円の日給をもらって、今日リンゴを買いに行ったらもう買えないというような話では、人様と取引やってられない。あなたの言った慣習性でしょうけれど、昨日一〇〇円のものはせいぜい一三〇円くらいにしておいてもらいたい、そういうものがないと交換関係そのものが成立しないですよ。

西部忠　だからと言って、コンベンション（慣習）があれば、それが実体や合理的な根拠になるかというと、僕は必ずしもそうは思わないんですね。予想にしてもコンベンションにしても、合理的な根拠がない。慣習というのは、昨日もあったから今日もそうで明日もそうだというだけで、つまりわれわれは一つの時代の中に惰性性を持っているだけで、なぜそうなのかということについては根拠がないと思っているんです。慣習にせよ予想にせよ、無根拠性からはどうしても免れないのではないか。

それは国家通貨の話ですが、地域通貨というのはむしろ、コミュニティへの信頼により下支えさせようということを考えているんです。現実の日本銀行券みたいなものが、本当に国家に対するトラストで成り立っているのかというと、疑わしいんじゃないかと。

主幹　それには少々異論があるけれど、やっかいだからやめておきましょう。ただ一言だけ抽象的に言っておくと、確かに合理的な根拠はあまりないことが多いんですね。問題はそのことではなく、むしろ合理性の世界が構築されるためには蝶番（ちょうつがい）的な、慣例としか言いようがない固定的な支えがないと合理性そのものが成り立たないということなんです。合理的に説明できないことが問題なのではなく、合理性の基盤がそうしたものにあるということです。

僕は、ヴィトゲンシュタインはコンサーバティブだと最初から思っていた。彼はこういうことを言っています。「ドアを開閉するときには蝶番がなければならない」と。つまりドアは開けるも閉めるも自由自在だが、蝶番という固定点がなければままならない。固定点というのは非合理で、何であるかは説明できないけれど、あるとせねばならんと。ヴィトゲンシュタインは、

合理性の無根拠性を言うことはできるけれども、逆に蝶番があるから合理性が生まれるんだということを言ったわけです。思想哲学論争になるからもうよすけれど。

西部忠　僕もそう思ってますよ。蝶番というのはあるし、固定支持点というのが必要だというのもわかります。根拠を与えようとするような合理化は誤っているということですよね。それならばいっそ、貨幣があるというところから出発するのがいいかもしれません。ただ更に言うならば、その蝶番が永遠に固定されているものかというと、そうは思わないということで。その蝶番をちょっと換えてみようと。

主幹　蝶番が錆びついたりすることもあるしね（笑）。

市場における調和と攪乱

主幹　ともかくローカルマネーのことについて僕は何も知らないので教えて欲しいんです。貯蓄・蓄積されたり、他のローカルマネーとエクスチェンジすることも、現にあるかどうかではなく、あなたの考えておられるローカルマネーの理論目標の中ではあるのかどうか。

西部忠　僕はされると思っていますし、現実にされているところもあります。幾つかの通貨がリンクしていますが、円とドルのように外国為替相場で売買されてレートが動くというよりは、レートも固定されている。今のところ一円＝幾らというように、地域通貨と円がリンクした状態が普通なので、それが可能になっているとも言えるし、それを全部とっぱらっちゃった時にはどうなるのかという問題は残っているんですけれど。

たとえば、労働にリンクさせるのか。AとBの通貨をどう交換するかというと、基本的に両方に属する人が二人いて、僕はあなたにAをあげます、あなたはBをください、というように、貨幣の物々交換を通じてやるべきだと考えます。そうでなければ貨幣発行量が一方だけ大きくなるということが起こって、もともと考えていた地域通貨の特性が維持されなくなってしまうと。

主幹　ふつう貨幣を蓄積するのは将来へのパースペクティブからですね。やっかいじゃないかと思うのは北海道貨幣から沖縄貨幣に至るまで県単位で発行したとして、国内の変動為替レートを考えるとしましょう。なおかつ蓄積の可能性があるわけだから、それなりの将来への見通しがなければ、何をどれだけ蓄積すべきか、交換すべきかわからなくなる。本当はハイエクに言いたいわけですが、死んじゃったからここで言いますと、彼は「国家が貨幣を供給するのは集権主義の始まりだ」と言った。中央銀行廃止論ですね。僕はそれに抵抗したい。もし人間にものすごい合理的能力があって、46都道府県の未来についてある程度のパースペクティブがあるというのは過大な合理性の要求なのではないかと思う。

絃　基本的にハイエクはその合理性を信じてないわけで、ハイエク寄りに解釈するならば、もっとローカルな情報だけでいいと。彼が考えているマーケットは、すべからくローカルな情報だけを持っている個人から成立してますよね。たとえば、全国には百以上の銀行があるけれども、自分の近くにはAとBしか銀行がない。せいぜい比較できるのはその二つだと。すべての人が自分の近隣の銀行だけを比較していくと、全体としてネットワークができるわけですね。そういうことを背景にしてどういう銀行が残るか残らないかが言えるだろうと。

主幹　それはそうだと思うけれど、ローカルマネーや民間マネーも含めて、それがうまくいくとしたら、社会の状況がかなり安定したstatic＝静態的世界でないとならない。僕はコンサバですからそれが好きなんですが（笑）。

絃　動いてはいけないわけですね（笑）。ハイエク的な世界では移動を言っているんですよね。

主幹　そうでしょう。それが彼の矛盾だと思うんです。

西部忠　彼は後期に行くほど進化主義的な発想になっていきますね。七〇年代の貨幣発行独占に反対した『貨幣発行自由化論』もそうですし、マーケットそのものも進化する秩序であると考えていく方向です。それは必ずしも、人間はどんどん合理的存在になっていくということを意味するわけではなくて、あくまでもローカルな情報・ローカルなアタッチメントがあるという中で成立するものだと考えていると思うんです。「僕はここしか知らない、あなたはそこしか知らない」というような、局所的な知識だけを知っているものの集合＝重ね合わせのなかでできてくるものがあくまでもマーケットなのだ、ということなので、その点に関しては、僕は、そうスタティックになっておしまいということではなく、当然動くのがマーケット・エコノミーだと思うんです。僕がお聞きしたいのは、むしろなぜ、動いてはいけないのかということなんです。

主幹　僕の方もあなたに問いたい。ハイエクの進化論、具体的に言えばさまざまなイノベーションが起こって、マーケットの構造が変わっていく。そこから進化が生まれるという時に、彼の中での暗黙の大前提として、マーケットは結局のところハーモニーを、つまり調和をもたらしてくれるものだという思い込みがある。したがって、昨日まで見たことがない商品があろうと、発明・発見があろうとも、結局マーケットが取引の調和・均衡を保つとハイエクは思っている。でもあなたが心配なさっているように、アルゼンチンの例でもグローバリズムでもいいけれど、マーケットというのは、恐ろしく不安定で不均衡な展開を遂げる。大袈裟に言えば、グローバル・キャピタリズムは徹底的にひび割れている。これに対する市民なり国民なりの自己防衛として、リージョナルな、ローカルなシステムを立ち上げていかなければならないということでしょう。ならば、ハイエク的な調和観というのと、ぜひとも喧嘩してもらいたい（笑）。

西部忠　僕は喧嘩してますよ（笑）。ハイエクは「マーケット・オーダー」と言っているわけですが、僕から見れば「マーケッ

ト・ディスオーダー」というのが生じている。それはいろんな市場で起きるわけですが、特に我々が目にするのが、マネーマーケットあるいはキャピタル・マーケットで、それらを一言でいえば、バーチャルなマーケットですよね。ハイエクはその問題を考えていなかったのか。彼が考えたのは市場の均衡ではなくて、もう少し広い意味での安定的な道筋だとは思うんですが、それにしては、われわれはディスオーダーを目にする機会が多い。ローカルなところに住んでいる人間というのはバルナブルです。つまり傷つきやすくて、自分は何も変わっていないのに、外のマーケットが変わったがために自分の生活も脅かされてしまうということがしばしば起きるわけですね。アジアの通貨危機も南米の場合もそうです。それに対してどうするのかを我々は考えなければいけない。

ここ数年日本で言われているのは、セイフティネットのような考え方です。僕自身は、地域通貨というのは単なるセイフティネットだとは考えていなくて、もちろん、外部のショックから地域を守るという点では、セイフティネット的な側面もあるし、先ほど先生がご指摘のように、それが地域の安定に貢献するものとして、現在と未来も含めて地域通貨をどういうものにしなければいけないかという問題もある。ただバーチャルなマーケットがひび割れする一方で、単にリアルなコミュニティだけで安定化させるというよりは、むしろローカルの意味をバーチャルの方向に開いていわば「グローバル」な方向からスタビライズ（安定化）しようというのが僕の考え方なんです。

主幹　おっしゃることはよくわかったけれど、僕はもっとリアクショナリーに、反動的に考えて頂きたいなあ。保護主義とか閉鎖主義と言われても構わないけれど、グローバル・キャピタリズムでも、ましてやマネーキャピタルでも、変動は絶え間ない。そんなものにはいつまでもお付き合いしておられませんと。たとえば北海道マネーなら全閉鎖とはいわなくても、ちょうど鎖国日本が長崎の出島でやっていたようにして（笑）、後は基本的に閉じてしまうものとしてローカルマネーというならば、僕も賛成したい。

西部忠　「Hマネー」という北海道マネーについては考えています。北海道レベルでならば、ある種の閉じる試みをやってもいいなとは思ってるんですけれど。

市場を成り立たせる公共財

主幹　妙なことが起こったと思うんです。七〇年代にアメリカで合理的期待形成というのがあったでしょう。経済学者が、日本経済がどうなるのかというのを勝手なエコノメトリック・モデルを作って予測した。それと同じように経済主体だって予測しているはずだ、と彼らはとらえる。そこで、アダム・スミス的、ハイエク的なものとは決定的に離れたと思うんです。アダム・スミスの場合は経済主体は自分の周りのことだけ知っていれば――簡単に言えば市場の価格だけですね――情報が価格に集約されていればいいと。ところが、合理的期待経済が考えたのは、各経済主体が日本経済も世界経済も全体のことを知っている、知りうるはずだということです。つまり自己関連（セルフ・インダレスト）的なことだけではなくて、自己を離れた経済を知っていることこそ合理的で、そういう主体がマーケットに入ってくるんだというふうにアメリカで考えられ始めたわけです。

西部忠　そういうふうになってくると、経済政策そのものがすべて無効になってしまうわけで、それがエコノミストたちの言おうとしてることだと思いますが、裏を返せば、それほど人間が合理的ならばマーケットに頼る必要があるのかという話になる。マーケットをいわゆる経済計画論で考えてもかまわないことになります。僕はもともと社会主義経済計算論争に興味を持って出発したんですが、計画経済に委ねればいいとか、市場社会主義にすればいいという話になって市場の存在理由がなくなってしまうんです。そういう市場観になってしまう。

もっと奇妙なのは、我々がいま目にしている、荒くれたキャピタル・マーケットがある一方で、市場像に関していえば非常にクラシカルな均衡論的マーケットの発想があって、その中の経済主体は極めて合理的なものであるとされています。そうすると実際の市場のあり方と市場の観念が非常に乖離していて、乖離しつつ市場に関する古典的な発想に基づく政策が次々に導入され遂行されるという二重三重の過誤の構造があるわけです。まずやるべきことは、市場の誤った見方を正すこと、もう少しまともな方に正すべきです。その点、ハイエク的な市場の見方の方がよりましです。しかしマーケットは必ずしもハイエクが言うようにハーモナイズされるものではなくて、タービュランスつまり大きな揺れが生じる不安定なものです。なぜそうなるのかというと、複雑系的な考え方で市場を見たときに、局所の小さなゆらぎが「系」を非常に大きく動かすことがあるからです。ただその時に重要な役割を果たしているのがマネーだと僕は思ってるわけです。あたかもマネーなきマーケットがあるというような考え方では、相対価格だけがマーケットにあれば資源が効率的に配分されるわけですから、マネーなどどこにも必要ない。しかし実際には我々はマネーを必要としている。マネーの必要性と現実の市場のあり方をまずきちんと認識しないと前進できないでしょう。こうしたところから、ローカルマネーみたいなものを考えていくべきだと思ってるんです。もし本当に合理的な人間ばかりならマネーは要らないですから、市場社会主義でも計画経済でもいいのかもしれませんが。

主幹　その通りですね。そのことと関係して、いわゆる市場の失敗の話ですが、まず未来の不確実性が大きすぎる規模の経済＝大規模生産の効率性はマーケットの独占・寡占を生みマーケットを不安定にする、共同消費せざるを得ない公共消費がある。つまり市場は失敗に逢着する。マーケットの至る所が穴ぼこだらけなのに、観念の上だけで市場競争が理想化されている。

西部忠　僕は貨幣も公共財だと思ってるんです。根本的に言うならば、それはすでに市場の失敗ということなんです。

主幹　そこで僕はこういうことを考えたんです。ほとんど自分は社会主義者かなと思うんですが（笑）。

絓　最近はそうなんではないですか（笑）。

主幹　たとえば日本人をみたときに、日本人にいま以上の潜在的欲望があるとすれば、それは主として公共的なものなのではないかなと思うんです。それをアソシエーションと呼ぶかパブリック・アクティビティと呼ぶかはともかく、一種の公共的な場における議論なり決定がないと、公共的なものは供給できない。そしてやっかいなことに、人間というのはいつも未来に向けて行動するわけだから、具体的なプロジェクトを考えるしかないわけですね。北海道のどこそこに巨大な田園地帯を作ろうとか、資源貯蔵地を作ろうとか、そういうことを官と民が関わる形でやっていく――すぐに絓さんなんかは冷やかして社会主義者の西部と言うけれども、それはともかく――官・民共同とまではいう必要はないけれど、公共的な場で、未来に向けての具体的なプロジェクトを考えていくとしましょう。あまり適切ではありませんが、道路の例で言うと、いつどこに誰が作るかと、問題を具体化すると、必ず地域に問題が差し戻されるわけです。詳しいことはわからないけれど、マネーに関しても地域性・地方性を考えて然るべきという脈絡になるだろうという気はするんです。

西部忠　いまはすべての税金を中央に集約して地方にばらまくという形になっています。北海道の場合でも公共事業の一〇％が北海道に入ってくる。域際関係でみると、それがあたかも資本収支プラスとして、貿易収支のマイナスをカバーしているようなことになっていたわけですね。しかしこれから、中央に集まった税金が北海道にこないとなると、税源を地方に利用するのがひとつのありうべき方向だとは思います。もう一つは、税金を中央に集める必要もなくて、そもそもマネーというのが、ローカルな部分から発生する、人々の活動に付随してその活動を信頼して使われるものであるならば、そういうお金を作ってしまえばいいという発想になってくると思うんです。しかも、国からくるお金はほぼ用途が決まっていますが、地元の人が要望を言えるなら、たとえば病院がほしいというプロジェクト＝公的欲求があった時に、税金であれば中央が吸い上げて配分先も決まっているわけですから、ダムが作られてしまうこともありますが、地元の人が、本当は病院が欲しいと言った時には、今までであれば政治システムでもって解決するしかない問題だったわけです。地元の人の意志が反映されるシステムとはいかなるものになるかと考えた場合、プロジェクトに対して投票したらどうかと。地域通貨において投票するというのではなく、実際にＡＢＣというプロジェクトを並べてみた時に、自分は税金を払う代わりにＡのプロジェクトに円を出します、その見返りに地域通貨をもらいますという形で地域の中で使えるものにしていけば、たくさんのお金が集まるプロジェクトは実現するし、集まらないところは動かない。そういう形ならば、いわゆる住民意志の反映が可能になる、あるいは盛り込めるんじゃないかということなんです。

主幹　わかりました。ただ僕は、地方分権主義というのには、かなり抵抗を感じるんです。中央集権か地方分権かという二者択一はおかしい。経済論だけでなく、あなたは嫌いかもしれないけれど〈国家論〉として言えば、国家と地方というのはインターリージョナルな関係である。中央か地方かというのではなく、それこそ色々なインターなつまり地域間の連関がある。全体に対してある種の基準を与えるものとしての中央を国家だと考えると、たとえば北海道は日本のためにこれができる、というふうになる。

温暖化で日本の平均気温が三度上がれば、北海道は豊かな穀倉地帯になるらしいんですが、何十年後かに日本が食糧危機に襲われた時、北海道がお前らを食わせてやるから、金出せと。その頃にはお前らは死んでるかもしれないが、お前らの子孫が北海道のおかげで食っていける、そういう可能性もあるわけでしょう。厳密に言えば世界全体の話になると思うけれど、ある地域が他とどうつながるかというところで、具体的なプロジェクトができてくるんじゃないだろうか。

西部忠　それは否定しないですよ。一言で「パブリック」といってもさまざまなレベルがあって、地方レベルのパブリシティもあれば国レベルもあるし、アジアレベル、グローバルレベルのパブリシティもある。そのどれかが特権的であるというふうに僕は思いません。ただ、各時代時代における適切なレベルに力が集中することはありますし、国民国家というのも、そういった形で出てきたものの一つだと思います。そういうなかで、国家というものの意味が変わるかもしれませんが、それがなくなるものでもないし、なくなるべきだとも考えていない。そういう意味では、最初の話でいえば、単なるアナーキズムではありません。多層的な公共性を考える場合、バランス感覚を重視します。ですから単なるインターナショナリズムだとかグローバリズムとは違います。どういうふうに配分するかは、それこそ知恵をもってなさなければならない。なので、ローカルマネーですべての片が付くとは思っていなくて、それは、なければいけない一つのツールだと思っているんです。

「未来」に備えるのはＩＴか組織か

主幹　脱線するようですが、どうして〈リージョナル・マネー〉と言わなかったんでしょう。globalは大域的、localは局所的ということですが、グローバルという全体のシステムから部分をとってきたときにローカルということになりますね。もしもリージョン＝地域というものにある程度の独立性が展望されて、それに基づく形の貨幣を言うならば、ローカル（地方）マネー

ではなく、リージョナル（地域）マネーと言った方が存在を誇示できるんではないかと思うんです。

西部忠　普通の言語感覚でいうと、「リージョン」というのは「ローカリティ」より広域を指すんでしょうね。元々のローカルマネーの発生が、本当のローカル・マネーつまり、「地元のお金」だったんでしょう、たぶん（笑）。我々はずっとローカルに留まる必要はないから、おっしゃる通り、リージョナル・マネーと言っても構わないでしょうね。

金儲けが上手なわけでもないのに僕がお金にこだわっているのは、お金というのが切り離しの装置だとも思っているからなんです。「切り離し」というのは、あるビジョンとあるビジョン、たとえばグローバリティとローカリティを切り離す、あるいは個人と個人を切り離す――売ったり買ったりということは一つの取引としてその他の取引から一応切り離すことができるもので、マーケット全部が均衡していないと取引が起こりませんよというのでは、いつまで待ってもグローバルに連結するはずがない。逆に、グローバルな連関があるから、その場その場でローカルな取引ができるわけですから。その発想からいうと、ローカルなものがグローバルなものとどう結びつくかという場合には、お金がないとそれは無理かなと。一つのお金しかないとなれば、一つの地域なり国が相対的な意味での自立性を持てないことになります。

主幹　よくわかります。話を戻すようだけれど、自分はイデオロギー的に言えば反米主義者で、観念的に言えば静態論者だという気がするのは、経済学とも関係してまして、先ほども少し言いましたが、こういうふうに考えたんです。経済活動にはどうしても組織が必要だ。企業のみならず、家族でもいいし地方政府でも産業組織でもいいんですが、とにかく組織が必要である。組織がなければ、未来という人間の持つ時間意識、あるいはそこから発生する不確実性に対応しきれない。次に、組織というものは人間関係の固定性で――吉本隆明的に関係の絶対性とか訳のわからんことは言いませんが（笑）――僕がどこかの組織にはめこまれたとすると、自分は幾ら貰えるというのがわからなければ働く気がしないわけです。ふたを開けてみて、今期は調子が悪いからお前には一、〇〇〇円しかやれないと言われたなら、何を言うんだとなるでしょう。これこれ貰うから、これこれの固定された期間、組織のメンバーであることを覚悟しますよとなる。ところがもっとやっかいなことに、賃金が固定される場合には、暗暗裏に一万円なら一万円の価値が見込まれている。つまりこの分で女房が米を買うだろう、この分では娘が芝居を見れるだろうというふうに、組織に入った途端、賃金の固定性に捕らわれる。そういう意味ではケインズが間違った文脈だけれども、賃金の下方硬直性ということをいったのは正しいとみなければならない。

一万円もらったら生活できるだろうというおおよその見込みが必要だということは、つまり将来価格が変わってもこの程度だろうという見込みがあるということですね。近代経済学者が言うような、マーケットを開いてみたら価格が上がりましたとか下がりましたなんてことはほとんど冗談話で、人間がマーケットに入っていく時には、買う方にすれば上がってこの程度、売る方にすれば下がってこの程度という、ある範囲での価格の安定性が見込めなければマーケットそのものが成り立たないと思うんです。そうなってしまったのは、経済に「人間」という要素が入った途端だと思うんです。そういう意味じゃ宇野学派もなかなか立派なところがあった（笑）。「労働力商品化の無理」ということをいったから。人間はロボットと違って電源を入れれば何でもやるという物とは違う。マルクスじゃないけれども、一日は二十四時間で人生は八十年で、動いてこの程度、悲しんでこの程度とか、そういう安定性というものをマーケットは前提条件として必要としている。

話がずれてしまったけれど、僕がセイフティネット論の考え方を嫌いなのは、マーケットはどんなことが起こってもマーケットですと言っておいて、転落したら網があるなんてことでは、そもそもマーケットに行く気がしない。そういう意味では、ローカルマネーのことも含めて、地域の中で安定性を確保していくことがマーケット論としても非常に重要だと思うわけです。ただそのためには、あらゆる経済理論と喧嘩しなければならない。それを「雑誌」で証明するのは無理です。与えられる原稿が十五枚、ましてや五枚ではどうにもならん。

西部忠　価格が動けば動くほどいいという発想になってますからね。僕も逆だと思います。ただ一時あったように、価格が硬直的で数量調整がいいのかというのとはまた話は別ですね。

主幹　それは違いますね。

西部忠　組織の話でいうと、組織というのは一種のバッファ（緩衝装置）だと思うんです。実際組織は様々な在庫を抱えています。在庫というのは「売れ残り」など普通はあまりいい意味で捉えられませんが、実は非常に重要です。在庫がインフォメーションでもあるからですね。在庫が涸渇してなくなってしまったら、生産の方は大丈夫かなという、組織の中における認識のフィルターとして、安定化のための装置としても働くべきものですよね。本来貨幣というのも同じような性質のものだと思うんです。一方に在庫のようなバッファがあって、もう一方に貨幣のバッファがある。その両方が安定化させるべきものとしてあって、その間に市場があると考えると、市場というのはもう少し安定的に動くはずなんです。キャピタル・マーケットだけで株や債権が売買されるようになると、つまり財やサービスの取引型の市場を離れてしまうと、途端に不安定になるんだと思います。

主幹　最後に、バーチャリティのこと。

絓　その話は厄介ですよ。保守の人にもそういう発想があってもいいと思いますが（笑）。

主幹　いやね、僕が駄目だと思うことが一つある。バーチャリ

ティというと、遠くの人たちとITを通じてコミュニケートし合うという現実はありますね。その過程をある程度きちんと予測できて、そこから大きく外れないという意味で物事が安定して進むとしたら、ITによって将来のことをおおよそ確率分布として捉えることができるという前提がある場合のみです。でも、未来のことを確率分布として捉えるなんてことは、近代経済学者どものとんでもないトリックで、それこそ「生の哲学」のディルタイの昔に戻らずとも、本質において歴史的出来事・人生的出来事は一回限りのものであり、一回しか起こらないことを確率分布で表現しようというのが土台無理であると言いたい。組織というのが言い過ぎだとしたら、人間の関係でもいいんですが、そういうところで起こるディスターバンス（撹乱）やディスオーダーに対して「人間」がチェックしていくほかないんだと思う。バーチャルな世界というのは、人間の未来に関する見通しについて、かなり的確に確率分布として押さえられるという偽りの前提が入ってきている。

西部忠　僕が言っているのは、ITを使って何か予測するということではないので、おっしゃる意味がよくわからないんですが。

主幹　でもローカルマネーの広域の取引にはどうしたってITによる未来予測ということが入ってくるでしょう。

西部忠　たとえば電話ではなくてEメールを通じてやり取りする、あるいはインフォメーションそのものをインターネットを通じて電送するということは、もちろん技術的な安定性がないとできないわけですが、ITということで盛んに喧伝されるのは、コンピュートピアの夢物語です。コンピューターを導入することであたかも不確実性が除去できるかのように言われている部分がある。それはまったくおかしくて、いずれにしても本質的に不確実で見えない世界を相手にしてるわけです。リアルな世界と同じことなんです。「バーチャル」と言うと、何かあたかも虚ろいやすい仮の姿を指すように思われるけれども、バーチャルというのは字義通りの意味で使っています。つまり「事実上は」ということです。「あたかも事実であるかのように」という意味で、つまり「観念」を指してるだけですから。

主幹　まったくそうですね。と同意したところで終わりにしますが、バーチャリティというのは忠さんが言われた通りなんです。人間精神の仮想性、それが幾たびも繰り返されるがゆえに、事実となる。そうなれば、コンベンショナリティに戻るということはないでしょうか？

西部忠　戻るというか、コンベンションなしではできないものですね。

主幹　ということですね。今日は、経済哲学の根本にかかわる話をいくつも、本当にありがとうございました。

（二〇〇二年三月）